青鬼調査クラブ 8

とらわれた仲間を奪還せよ！

noprops・黒田研二／原作
波摘／著
鈴羅木かりん／イラスト

PHP
ジュニアノベル

レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

優助

北部小学校の五年生。レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サッカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。

スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。

たまちゃん――
ひとだまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。

魔尾町現悩（ゲンノウ）――
オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いており、夏休み明けから北部小学校・オカルト調査クラブの顧問となった。

知香――
二十年前、家族でまほろば遊園地を訪れた際に事件に巻きこまれ、青鬼の《王種》となった少年。二十年間、『地下の王』として遊園地の地下で孤独に過ごしていた。今はレイカたちと協力関係にある。

ひろし

北部小学校の五年生。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。

クロさん

レイカたちがまほろば遊園地を調査している最中に出会った男性。青鬼に詳しいが、危険人物のようだ。

ハルナ先生

レイカたちやひろしが通う北部小学校の教師。クロさんの裏切りによって心に深い傷を負い、現在、学校を休んでいる。

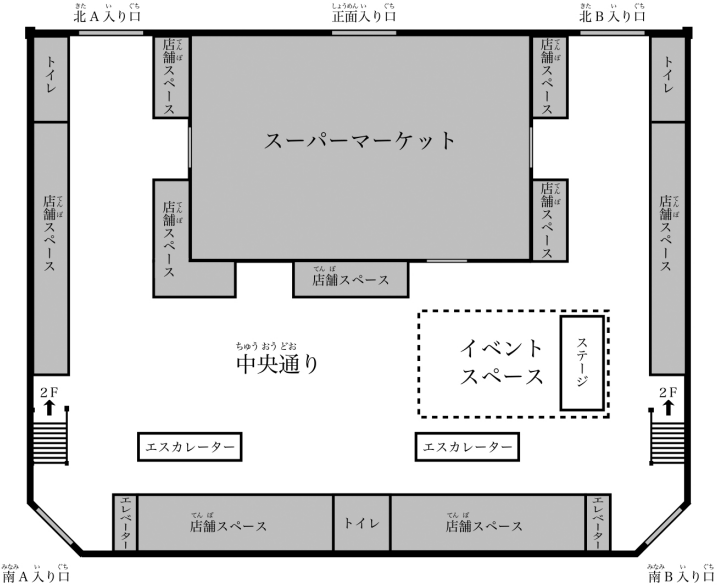
青鬼調査クラブ 8

碧奥モールの見取り図 ―― 006
1 調査クラブの協力者 ―― 009
2 碧奥モール ―― 022
3 メサイアの犬 ―― 033
4 月明かりの下 ―― 044
5 侵入者 ―― 051
6 予想外の再会 ―― 058
7 調査クラブとの激突 ―― 068
8 油断できない相手 ―― 078
9 友だち ―― 098
10 不吉な予感 ―― 112
11 あふれ返る。 ―― 125
12 総力戦 ―― 132
13 落下 ―― 146
14 ソル ―― 158
青鬼調査レポート ―― 168
碧奥モールの見取り図　その2 ―― 172

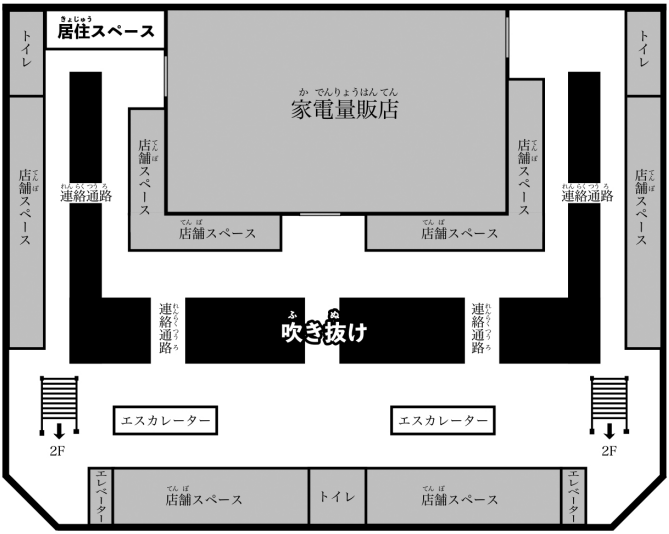
碧奥モールの見取り図

…封鎖中の区画＆扉

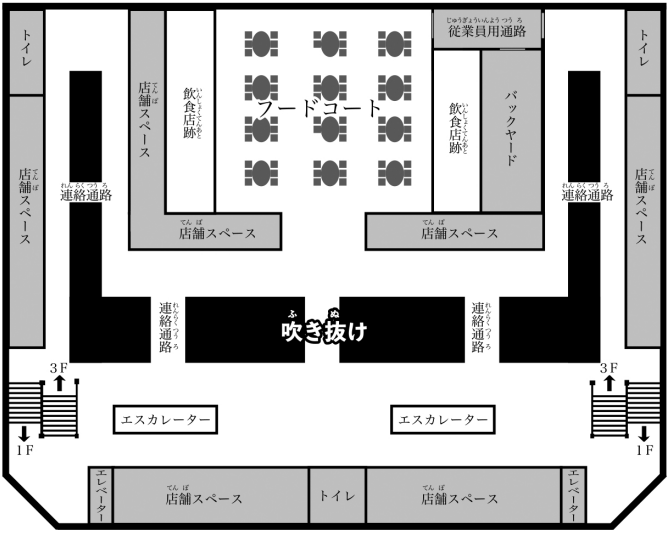
1F



3F


居住スペース
家電量販店
トイレ
店舗スペース
連絡通路
吹き抜け
エスカレーター
2F
エレベーター

2F


従業員用通路
トイレ
店舗スペース
飲食店跡
フードコート
バックヤード
連絡通路
吹き抜け
エスカレーター
3F
1F
エレベーター

あらすじ

碧奥天文台で、四体の青鬼『右手』『聞き耳』『四足』『収縮』を従える少女『兵隊の王』と戦い、敗北したオカルト調査クラブ。

レイカは仲間を守るために『兵隊の王』との取り引きに応じ、調査クラブのメンバーたちの前から姿を消したのだった……。

その後、目覚めた優助、スズナ、ゲンノウ、知香、たまちゃんは、行方不明になったレイカを探し、助け出すため作戦を開始する。

1　調査クラブの協力者

九月十八日。
放課後の部室には、レイカを除いた調査クラブのメンバーが集まっていた。
優助、スズナ、ゲンノウ、知香は椅子に座って、みんな難しい顔をしている。たまちゃんはそんな彼らを眺めながら、ふわふわと浮いていた。
「それじゃ、作戦会議を始めるぞ」
優助が真剣な表情で切り出す。
「まずは情報の整理からだ。昨日、俺たちは碧奥天文台で『兵隊の王』と戦って負け、全員が意識を失った。そして目覚めた時、レイカがいなくなっていた」
「天文台の中を全員で探しても、手がかりはまったくありませんでしたよね……。レイカちゃんのスマホは電源が切られてるようで、連絡もつきません」
スズナが心配そうにうつむく。
重い空気が流れる中、ゲンノウが話をまとめる。

「状況から考えるに、レイカ君は『兵隊の王』に連れ去られたと考えるのが妥当だろう。『兵隊の王』とレイカ君の間でどのようなやりとりがあったのかはわからないが、私たちはどうにかしてレイカ君を取り戻す必要がある」

ゲンノウはいつもと違って真面目な顔をしていた。それを見たスズナが不思議そうに目を細める。

「ゲンノウさん、今回はずいぶんと真剣ですね。いつもは私たちが危険な目にあっても、あんまり本気で心配してくれないのに」

「それは君たちが自分の力でなんとかできると思っているからさ。私は信じているのだよ、子どもたちのことを」

軽く鼻で笑いながら、ゲンノウはそのように答えた。
それがウソか本当かは誰にもわからない。
「だが今回は話が別だ。レイカ君は私の青鬼研究を進める上で必要不可欠な人物だ。『兵隊の王』に奪われるわけにはいかない」
そのゲンノウの言葉に優助がうなずく。彼は鋭い目つきで、机の上に両肘をつき手を組んだ。『兵隊の王』に対する怒りがにじみ出ている。
「レイカを早く連れ戻さないと、そのうち周囲の人間が騒ぎ出すはずだ。ひとまず昨日から今日にかけては、知香の変身能力でなんとかごまかせてる。だけど、バレるのは時間の問題だ」
「まさかこんなふうに力を使うことになるとは思ってなかったよ」
知香が小さくため息をつくと、彼の身体の表面は青いドロドロの液体におおわれていく。
数秒して表面の液体がすべて蒸発すると、そこには知香の代わりに、レイカにそっくりな外見の少女が現れた。
その少女は『知香の声』で話し出す。
「元々、ボクの少年の身体は『地下の王』の力で作り出したものだから、少しアレンジを加えれば、こうやって別の人間になりすますことができる。今は自分の声で話しているが、声色も本物

そっくりに似せることが可能だ。ただ、レイカ本人しか知らないことには答えられないし、仕草だって彼女とまったく同じとはいかない。優助の言う通り、そのうちごまかしきれなくなると思う」

「本当にレイカちゃんそっくりですね……」

スズナがレイカの姿に変身した知香をまじまじと観察する。

碧奥天文台から帰る際、調査クラブのメンバーの頭を悩ませたのは、レイカがいなくなったことをどうやって周囲に隠すかという問題だった。

レイカが家に帰ってこなければ、彼女の両親は警察に相談するだろう。

そうなれば事件に発展するのは間違いない。

――ただでさえ、碧奥天文台は世間から注目されてしまっているのだから。

『兵隊の王』の青鬼たちが天文台に現れた時、多くの一般人の目に触れてしまったため、優助たちが天文台から抜け出した頃には、すでに「怪物が出た」というウワサが碧奥山を中心に広まっていた。

そしてそれよりも深刻なのは、研究棟の二階で血を流して倒れている二人の研究者が発見されたことだ。

二人の研究者を見つけたのは優助たちだった。
優助たちはすぐに天文台の電話で緊急通報をおこない、救急車を呼んだ。
自分たちの携帯を使わなかったのは、電話番号で身元がバレてしまうからだ。
なぜ研究棟にいたのかと理由を聞かれると困る。そのため、優助たちは救急隊が到着する前に、レイカが天文台にいないことだけ確認するとその場を去ったのだった。
こちらの件は実際に被害者が出ているため、警察はすでに捜査を始めていて、何者かが天文台を襲撃したという方向で話がまとまりつつある。
怪物のウワサについては何者かが襲撃した際、その場に居合わせてパニックになった人々が見た集団幻覚だろうという結論になったようだ。『兵隊の王』との戦いの跡も、その何者かの仕業として処理されたらしい。
そんな状況の中、レイカが天文台で行方不明になったことが判明したら、かなり大きく報道されてしまうだろう。下手をすれば、顔写真なども出回るかもしれない。
大きな事件になってしまったら、『兵隊の王』はレイカを連れて、どこか遠くに身を隠してしまう可能性があった。
そうなったら、レイカを取り戻すのはかなり難しくなるだろう。

だからレイカがいなくなった事実を少しの間だけでも隠すため、少年や探偵はんぺんなどいろいろな姿に変身できる知香がレイカのフリをすることになったのだ。
変身した知香は天文台からレイカの家に帰り、今日の学校の授業にも全て出席している。
周囲に気づかれた様子はないが、時間が経つにつれて、話し方や考え方などで怪しまれるようになっていくのは明白だ。
知香はサービスのつもりか、一度探偵はんぺんの姿になると、スズナに可愛く手を振ってから元の少年姿に戻る。
スズナは探偵はんぺんの姿を見て、ほんわかした笑顔を浮かべた。
「探偵はんぺん、すっごく可愛いですよね」
しかし、いなくなったレイカのことを思い出したのだろう。スズナはまたすぐ難しい顔に戻ってしまった。
優助はせき払いをしてから話を戻す。
「できれば事件にすることなく、レイカの奪還を成功させたい。でも、問題が二つある。一つは『兵隊の王』が従える四体の青鬼を倒せるだけの戦力がないこと。そしてもう一つはレイカの現在地がわからないことだ」

碧奥天文台で、調査クラブは『兵隊の王』の兵士である青鬼たちに負けた。
これはまぎれもない事実だ。
天文台での戦いは青鬼との一対一という、優助たちにとって非常に不利な条件だった。
調査クラブ全員で一体の青鬼を相手にすれば、勝つこともできるかもしれない。
しかし、実際にそんな状況に持ちこむのは難しいだろう。
調査クラブが全員で力を合わせて戦おうとすれば、相手だって四体同時に襲いかかってくるのが普通だ。
——そうなると、やはり調査クラブは勝てない。
優助が青鬼化し、知香が《王種》の力を使っても、スズナとゲンノウは特別な能力を持っているわけではない。
今まではレイカがいたから、全員が上手く活躍できるような作戦を立てることができていた。
だけど今回はレイカがいない。
いつものように戦えると思わないほうがいいだろう。
もしも青鬼と正面からぶつかるような戦いになってしまったら、スズナとゲンノウは近寄ることさえできなくなってしまうはずだ。

そして、そもそもの問題としてレイカのスマホの電源が切られている以上、連絡を取ることができず、居場所を特定するのは非常に困難だ。

しかし、『兵隊の王』に連れ去られたという推測が正しければ、『兵隊の王』の拠点にレイカがいる可能性は高い。

四体の青鬼たちを連れたまま、ずっと移動し続けていたら、大勢の人に目撃されてしまうだろうし、『兵隊の王』たちが姿を隠すための拠点は必ずどこかにあるはずだ。

「……青鬼が隠れ家にしそうな場所をたくさん知っていて、なおかつ青鬼と戦える。そんな理想的な協力者がどこかにいればいいんだけどな」

ため息をつく優助に対し、スズナが真面目な表情で「はいっ」と手をあげる。

「ひろし君たちはどうですか？　頭が良いひろし君なら『兵隊の王』の隠れ家の場所も見つけてくれるかもしれません」

「それは俺も考えた。でも、ひろしたちはいつも正面から青鬼を倒してきたわけじゃない。どちらかというと、上手く頭を使って逃げきるのが得意分野だろ？」

苦々しい声色で優助が答える。

「今回は助けを求めるべきじゃないと思う。絶対に『兵隊の王』の青鬼たちと激しい戦いになる

からな。それにさすがに手がかりの一つもない状態じゃ、ひろしだって隠れ家の位置を推測することはできないはずだ」

スズナもその通りだと思ったのか、あげていた手をそっと下げた。

「確かに優助君の言う通りですね……。ひろし君たちを危険な戦いに巻きこむことは、レイカちゃんも望んでいないと思います」

部室内に重い空気がただよう。

そんな中。

「――青鬼に詳しく、戦える人物か」

心当たりがあるといった様子で、にやりと笑ってみせたのはゲンノウだった。

「それならちょうどいい人物がいるじゃないか」

「誰ですか？」

スズナは小首をかしげて質問する。

「君たちも知っている男だよ。まほろば遊園地の地下で出会った――偽の魔尾町現悩さ。たしか、クロと名乗っていたはずだ」

ゲンノウの言葉で優助たちは思い出す。

まほろば遊園地の地下、食材倉庫でやけに青鬼に詳しい青年と出会ったことを。
しかし、優助は厳しい口調で告げる。
「ゲンノウさん、忘れたんですか？　俺たちはあの場所でクロさんと戦いになったんですよ？　向こうも俺たちのことを敵だと思っているはずです。協力してくれるとは思えません」
「ふっ、優助君。君はまだまだ子どもだね」
「小学生なんだから当然だろう」
にくたらしく笑うゲンノウに知香が短いツッコミを入れる。
ゲンノウは気にせず、優助を見つめたまま話を続けた。
「いいかい？　大人というのは、場合によっては嫌いな相手とも協力するものなんだ。自分の利益になる時は特にね」
「利益……」
優助は目を細めて考えこむ。
知香に視線を移したゲンノウは少し真面目な顔をして聞く。
「クロと名乗った青年はあの地下で何かを探している様子だった。彼の動きをしばらく見ていた知香君なら、何を探していたのか、ある程度予想がつくんじゃないか？」

知香は静かに目を閉じ、少し考えてから口を開いた。
「おそらくクロが探していたのはパラサイトバグだと思う。園内には人間の体内に入ることなく力つきた、パラサイトバグの死がいが残っていた。クロが青鬼の仲間であるなら、大切なパラサイトバグはすべて回収したいと思うはずだよ。人間や動物にパラサイトバグを食べさせれば、青鬼に変化させられる。つまり仲間を増やせるんだから」
ゲンノウは重要な情報を手に入れたというふうに、上機嫌でパンと手を叩いた。
「それなら彼を協力者にすることはとても簡単だ。今回――『兵隊の王』の青鬼を倒して手に入れたパラサイトバグはすべて彼に渡す。この条件なら喜んで協力してくれるだろう」
「……でも、クロさんにパラサイトバグを渡して、本当にいいんでしょうか？　結果的にまた危険な青鬼を生むことになりますよね？」
ひどく迷った様子でスズナがつぶやく。
「たしかにスズナ君の意見は間違っていない。しかしレイカ君を助けられるのであれば、多少のリスクは負うべきだ。どうしても気になるのであれば、レイカ君を見つけた後、あの青年がパラサイトバグを使用する前に奪い返したっていい。そうは思わないかね？」
そう問われたスズナはしばらく考えた後、覚悟を決めたようだった。

「ゲンノウさんの言う通りです。わかりました。レイカちゃんを助けるためなら、パラサイトバグをいったん差し出すことは我慢します」
「優助君はどうだい？」
「俺もゲンノウさんの提案に乗ります。今は協力者を増やすほうが先ですから」
あと意見を聞いていないのは知香だけだ。
ゲンノウがたずねるように目を向けると、知香は同意するように無言でうなずいた。
「では決まりだ。さっそくあの青年を呼び出すとしよう」
満足げにゲンノウが笑みを浮かべる。優助は疑問を口にした。
「そういえば、どうやってクロさんと連絡を取るつもりなんですか？　連絡先とか知らないですよね？」
「心配はいらない。ようやくこれを利用する時がきたのだよ」

そう言って、ゲンノウは机の上に置いてあったノートパソコンの電源を入れる。
そのまま何かのサイトを開くと、優助たちのほうにくるりと向けた。
「これは……」
優助が驚いたように目を見開く。
画面に映し出されていたのは、見覚えのあるページ。
映像の生配信をおこなうことができる、動画サイトのログイン画面だった。